
リミテッド

子梨萬

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

リミテッド

【Nコード】

N1718C

【作者名】

子梨萬

【あらすじ】

『ドーム』なる聖域に住む神の一族から『予言』を享受し、それを指針として生きる人々。喘息を持ち、人の役に立てないというコンプレックスを抱えた少女トリンは、『予言』を伝える媒介となる聖職、『神子』を目指す。予言に反対する幼馴染の少年キスクと突然の再会を果たす。トリンを止めようとする一方で、あくまで神子を自分の運命と信じて進もうとするトリン。その行き着く先は・・・？

1 .

我々が未来を選ぶのか。 ——— あるいは、未来が我々を選ぶのか。
我々が運命を疑うのか。 ——— あるいは、運命が我々を疑うのか。

我々は何を理由に生きるのか。

——— あるいは、我々は生きることどんな理由をつけるのか。
理由がないと生きてはいけないのか。

——— あるいは、理由がないということを知ってこそ生きられるのか。

1 .

夕焼けと影によって、並んだ石造りの建物が細長い三角形に切り分けられていた。

少女が重い木製の扉を押して出てきた建物は、完全に黒い方の部分に入ってしまった。長い束縛から解放され、ようやくその建物から出てきた少女は、ん、と小さく伸びをした後、辺りの暗さに顔をしかめた。

その建物は、東西に伸びる大通りの端に位置しており、今そこを出てきたばかりの少女から見て左方向に見渡す限り真っ直ぐな道が伸びていた。その真っ直ぐな道は、見える限りずっと先まで、影に覆われている。ずっと向こうの方にある建物が、上の方だけ光を浴びて輝いて見える。

右を向く事を避けて、少女は左の方向へ足を踏み出した。

少女は影の中に溶けるようだった。

肌は褐色、癖の強いウエーブのかかった短髪も、丈夫な造りをし

た綿の上着も、その下に覗く肌着も、果ては靴やベルトまで、ほとんど黒尽くめだった。

圧倒的な黒に対して目立つものと言えば、上着に縫い込まれた、T字を逆にしたような白い模様と、茶色のPOCHと、首元に少しだけ覗いた白色のチョーカーくらいのものである。腰の小さいPOCHの他に持ち物はなく、普通程度の大きさのランプを、まだ火は点さずに、右手に提げている。

背はけて高くはなく、体つきも全体的にほっそりとしていた。膝まであるスカートが初冬の風になびき、少女の身体が揺れる。

「トリンさん」

わずかに遅れて、同じ建物から小走りに駆け出してきた別の少女が黒い少女の名を呼び、足を止めさせた。名前を呼ばれた黒い少女は、明らかに振り向くかどうか迷ってから、

「……何だよ」

素っ気無い返事と共に振り向いた。離れているのはほんの数メートルだが、辺りの暗さのせいで互いの姿はほとんど見えない。

呼び止めた方の少女は、白い肌、長めの金髪を後ろに流していて、印象としては黒い少女と様々な意味で正反対な感じだった。チエツク模様の赤っぽい服は、素人が見ても値の張りそうな滑らかな生地を使っている。そして、彼女の首にも、白いチョーカーがあった。

「トリンさん。やっぱり、ここまで残られたんですね。お互い、明日は頑張りましょう」

表情ははつきりとは見えないが、微笑を浮かべているのが目に見えるようだった。

それに対してあくまで仏頂面で、少女を睨むように細い目を向け、
「……それ、残った奴全員に言ってるのか？」

トリンと呼ばれた少女が口を開いた。

「ええ」

静かに、しかし存在感のある澄んだ声で、もう一人の少女はトリンの問いに対する動揺もなく肯定した。

「……ご苦勞なことだ」

トリンは表情を曇らせ、そして少女に構わず再び歩き出した。

「頑張りましょうね」

「あんたは、今日も馬車のお迎え待ちか？」

「ええ」

少し棘のある言葉に、穏やかな声で少女が答える。

「……むかつく」

かすかなトリンの呟きは、他の誰にも聞こえることはなかった。

二人の間に圧倒的な面積の影を落としている巨大な建物が、文字通り壁のように白い少女の背後にそびえ立っている。

首をどれだけ上に向けてもその上端は見えない。実際の形はつぶれた半球のような形状をしているということは学者達によって予想されているが、こうして下からのぞいてみたところで、それがどのような形をしているのかなど到底知ることも出来ない。

半径五キロメートル超、高さ五百メートルほど。高さも面積も、建物としてはありえない大きさだった。

だが、それはそこに、当たり前のように建っている。ありえない大きさの、トリンからしてみれば気味悪くすらあるそれは当たり前のように人々に受け入れられ、それどころか日々数千人もの人々が見に訪れるような、観光あるいは崇拜の対象にすらなっている。

『ドーム』。その建物は形状から、単にそう呼ばれている。あるいは、『聖域』。

我々に知をもたらし、繁栄に導く全知全能の神々の住む場所だった。

ファーサルは、北ジラントと南ジラントの二つの川の間の扇状地に建設された国家であり、外国との交わりのほとんどない、歴史的に自給自足で自己完結した国として存在してきた、文献を信じるのならば五百年程の歴史を持つ国である。

『ドーム』の東方に位置するストランドはファーサルの中でも最も都会と言える地区であり、ドームの東に接し、五、六キロメートル四方に広がっている。

トリンが現在住んでいる家は、ストランドのほぼ中心部に位置していた。通りを真っ直ぐ歩いてさえ行けば、やがて見えてくる靴屋を左に曲がるだけでたどり着く。

距離としては二キロ半程度か。早足の自分に見れば、三十分はかからない距離だ。

だが、遠い。

遠かった。自分にとっては。

誰もが当たり前のように歩いていくような距離でも。

試験の時から続いている頭痛がうつとうしかった。試験の時はいつも緊張のせいだか分からないが頭痛に見舞われる。今日はいつもなお悪かった。恐らくは、試験の内容のせいだ。今日の試験は、椅子に座って眠らされるという、いつにも増してよく分からないものだった。眠っている間に何かされたらしいが、それが何なのか見当もつかない。

一つ乾いた咳をすると、頭に痛みが響いた。唾を飲み込むが、どうも咽喉に違和感がある。

(……来た、か)

まずいな、と自分に言い聞かせるように呟いて、トリンは少し歩くスピードを落とした。砂をはらむ風のない屋内に早く入りたいものだが、まだ家は遠い。唇を軽く噛んで、前を見つめなおす。と、

行く手の道が封鎖されていた。

まだ人通りの少なくない通り。それを端から端まで塞いで、持ち運びの出来る低い木の冊が並べられ、その手前、柵を囲むようにランプが配置され、外側に何人かの人間が立っている。全員が同じような灰色の動きやすい制服を着ている。そして首には、金属製ではないようだが銀色の光沢のあるチョーカー。その材質を、トリンは知らない。

封鎖の理由は、疑いようもなかった。それは、この国に住むものなら誰でもそうだろう。通行人たちは大して困った素振りも見せず、横道に入ったり、封鎖の解除を待つように道の脇に腰を下ろしたりと、それを受け入れている。

（よりによって、こんな時に……）

だが、トリンにとってそれは障害物だった。溜め息をつき、封鎖によって囲まれた、何も無い空間を睨む。

だが、そうしたところで何も変わることはないということも分かったことではあった。トリンはかすかに舌打ちし、銀色のチョーカーの男の一人に尋ねる。

「予言？」

短く尋ねられた男は、ああ、と肯いた。

「今から十分後に、乗合馬車と通行人との衝突事故が予言された。予言の回避が確認されるまで、ここを封鎖している」

トリンが小さくため息をつくとき、若い男はトリンを軽く睨んだ。

「封鎖が、不満なのか？ 急いでいるのかい？」

「まあね」

トリンが不機嫌を隠さずに言うと、男は子供を諭すように続けた。「そうか。だが、これは事故を避けるために行なわなければならないものなんだ。予言では、この事故が起こってしまった場合、六人もの死者が出るということだ。それを防ぐために、封鎖をしなければいけないんだ。分かるね？」

「それくらい分かってる……子供扱い、しないで」

不満そうな態度を崩さない少女の様子に、男は脅すように付け加えた。

「もしかしたら、事故が起こったら死ぬのは君かも知れないんだよ」
「かもね」

やはり、トリンは動じなかった。男の不快を露わにした視線を正面から受け止め、

「この封鎖、どんな範囲なの？ 回り道できる？」

やはり短い言葉で尋ね返す。

「あ……ああ、こっちの二つ向こうの広い通りまで行けば、封鎖を回りこめるよ」

「分かった。ありがとう」

言いながら、既にトリンは示された方に歩き始めていた。

「……何だ、あの生意気なちびは」

男の洩らした呟きが、

「……………」

目と耳は人一倍いいトリンには聞こえていたが、トリンは無視して歩き続けた。

すれ違う人と自分の背の高さを比べて、ちよつとため息をついた。未だに、学校の生徒と間違われる事さえある。

もう、十六になった。神子として立候補できる年になった。やっと。

あまり外出が好きなほうでないトリンにとっては、いつもの通りから二つ横に外れた通りは既に未知の場所だった。

いつもの大通りと比べて、道はそれほど狭くないが、人はやや少ない。道も、多少なり暗い。

トリンはまた乾いた咳を一つし、唾を飲み込んだ。咽喉の違和感は大きくなっている。咽喉の中を埃が舞っているような気持ち悪さがある。

大きく鼻から息を吸い込むと、ひゅう、という掠れた音が漏れた。喘鳴、という奴だった。喘息の特徴的な症状の一つである。

（封鎖が開くのを——待ってれば良かったかな）

足を止めずに、そんなことを考える。この喘息という奴は、冷え込んだ中を歩いたりすると症状が出やすい。それに、予定が狂ったり慣れない所を歩いたりして、身体が無意識に緊張している時もある——そう、今なんかは、最悪だ。

咽喉の違和感を極力意識しないようにしながら、しかし立ち止まりはせずに、闇の中に足を踏み出し続けた。今さら戻るの嫌だった。

（……ち）

だが、喘息の症状の悪化は思ったよりも早かった。息苦しさは増し、周期的な胸を突き刺すような鈍い痛みは、歩くのを止めると警告しているようでもある。乾いた咳を繰り返しながら、次第に歩く速度は落ちていった。

（つくしょう……）

ついに歩き続けることを諦め、トリンは足を止めた。そろそろ封鎖を回りこめただろうか——歩き続けるのに精一杯で、どのくらい歩いたのかよく分からなかった。

道の端に座り込み、ランプを自分の横に置くと、ベルトに通した茶色のポーチを開けた。常に持ち歩いている、喘息の粉薬と水の入った小瓶。

蠟の染み込んだ紙で包まれた粉薬を慣れた様子で口の中に流し込み、小瓶の水で飲み込む。慣れても嫌いには変わらない粉薬に、トリンは、うえっ、と苦そうに舌を出した。

一つため息をつき、道に面した家の軒下に座り込む。薬が効いてくるまでにしばらくかかる。その間に動くとも効果が薄れてしまうため、しばらくは動けない。

——動けない。ただ、歩いてきただけなのに。
どうして、これしきのことではなくなってしまふのだろうか。

どうして、こんなにも苦しいのだろうか。

どうして、自分はこんな身体なのだろうか。

どこか他の他人ではなくて、どうして、自分が？

他人が苦しんで欲しいわけではない。だがそれでも、他人を嫉妬せずにいられない。うらやまずにいられない。

（——むかつく——）

寄りかかっているのはどうやら酒場か何からしく、客達の楽しそうな話し声が外にまで流れていた。何かの楽器の演奏も聞こえる。歌も。

トリンは歌が好きだった。出来ることなら口ずさむくらいのことではなかったが、薬を効かせるためにはあまり咽喉を使うわけにはいかない。

（むかつく——けど、薬が効いてくるまでの暇つぶしにはなるかな）歌うことすら出来ない——その事実にもう一度ため息をついて、

トリンは本格的に軒下に座り込むと、曲に耳を傾けた。

その時だった。

「あつ！」

突然の子供っぽい高い声が、歌をかき消した。

通り過ぎたのは、馬車だった。二頭立ての、大きな幌馬車。それこそ旅でも出来そうな、大した代物だ。

「すいません、停めて下さい！」

聞きなれたというわけでもないが、よく覚えている少女の声に、御者が手綱を引き、馬車はトリンを通り過ぎて少し行った所で止まる。

砂埃が派手に舞った。トリンは顔をしかめ、服の襟を持ち上げて口を覆う。しかし、顔をしかめたのは、砂埃に対してだけではなかった。

「トリンさん、ですよね？ 大丈夫ですか！」

少しあって、その馬車から顔を出したのは、案の定。

「ウイネ」

先ほど別れたばかりの白い少女の名を、トリンは感謝と悔しさを半分ずつ混ぜたような声で呟いた。

止まった馬車の中では、なにやら会話が交わされていた。驚いたような男の声が、自分の名を呼んだのが聞こえた。全てを聞くには少し遠すぎたが、何を話しているかを聞いたところで何も出来はない。歩く事すらままならないのだから。

程なく、馬車から別の人間が降りた。男。自分の名を呼んだ人間だろうか。背は高いが、がっしりしているというわけではない。服はそれなりにいいものらしく、センス良く青っぽくまとめている。年はウイネや自分と同じくらいだろう。ウイネの兄弟だろうか。

その男が、こちらに向かって走ってきて、そして――

「トリン！」

突然に、名を呼んだ。

「へ？」

トリンは思わず、掠れた声でそう洩らした。意味が分からず、思わず男を見つめた。やはり、男に見覚えはない。もともと付き合いのある人間さえ、そう多くない。ましてや金持ちの知り合いなど、ウイネくらいのものだ。

「トリン、大丈夫か？」

男はあくまで自分の名を呼び、道にしゃがみ込む自分のすぐそばに膝をついた。

「まだ、喘息は悪いんだな……」

その言葉に、瞬間的に、選択肢にすら入っていなかった可能性が頭の中に浮かんだ。

その男が馴れ馴れしくも自分の背中をさする時には、既に可能性は確信に変わっていた。

それは、声に出すと信じられないくらいに懐かしい音だった。

「キスク？」

「久しぶりだな、トリン」

キスクの声は、驚きのためだろう、興奮した様子だった。無論、それはトリンも同じだ。

こちらに来てからは、会うどころか噂を聞いた事もなかった。

「どうして……」

「どうしてこんな場所に居るのか、ってか？ こっちこそ聞きたいさ——だがともかく、その喘息をどうにかするのが先だ」

滑らかで、どこか歌を思わせるような科白運びは、農村地区のレルマーに居た頃と変わらない。服装は、向こうに居た頃とはずいぶん変わったが。だが確かに、思い出してみれば目の前の男の顔は紛れも無くキスク＝ルルドのもので、今来ている青系の服も、むしろ似合っている。

「薬は持つてるのか？ 昔はいつも携帯していたろう——」

「もう、飲んだ」

自分の言葉はキスクと比較して短く、時にはそのために意思の疎通に失敗することもある。だが、

「そうか。じゃあ……そうだ、家はどこだ？ 方向が同じなら、近くまで馬車で送っていくよ」

キスクはそれだけで分かったようだった。通じるのだ、キスクには。

「お前……」

掠れた声で尋ねようとしたのは、キスクが何故ここに居るのかという、ごく当たり前のことだった。それを聞かずに、どこについていくわけにもいかない。

「喋らなくていい」

キスクの声が、その問いを遮った。遮られなくとも、息苦しさで

ちゃんと尋ねることは出来なかっただろう。それを、遮った。

「ウイネ……さん、のことは知ってるんだろう？ 俺は今、そこで雇われてる。詳しく知りたいなら、後で話そう。ともかく、馬車に乗れよ」

トリンは、思わず苦笑した。どうしてこいつは昔から、こんな風に話す前に何が言いたいかを理解できるんだろう。

そして、馬車に乗ることを選んだ。

もっと警戒をすべきなのだろう。それは分かっていた。それでも、そちらを選んだ。

「立てるか？ 肩を貸すよ」

「自分で平気」

短く答え、立ち上がった。息はまだ苦しかったが、極力、人の手を借りないというのは、負けず嫌いの自分の昔からのポリシーだった。

キスクが使用人なのであれば、雇い主はウイネ、あるいはそ家族なのだろう。

ストランドには、いわゆる金持ちの連中が、人口の比率にして二百五十人に一人くらい居る。古い時代に、何やら特別な立場だったとか特別なことをしたとかの理由で、自分達とはレベルの一つ違う金銭感覚を持った連中だ。

ウイネ、正確にはウイネの一族も、いわゆる金持ちだった。家を見たりしたわけではないが、迎えるためだけに馬車一台を動かせるのだから、恐らくは相当なものなのだろう。かと言って自分にそんな財産が仮にあったとしても何に使えばいいのか分からないというのが正直なところだから、それほどうらやましいとは思わないが。

それとはかく、馬車の所有者はキスクではなくウイネの一族なのだから、いくら自分がこのような状態だからとは言え、勝手な判断で自分のような普通の人間を馬車に乗せることは出来ないだろう。

それでもウイネに断る前に馬車に乗せるという方向に話を持っていたというのは、ウイネが断ることはないと思つての事なのだろうか。

「分かりました。ひとまず、屋敷までトリンさんに乗せさせていただきますしょう」

自分も、あのウイネならば、断りはしないだろうと思つた。そして実際、ウイネは断らず、自分を馬車に招き入れた。幌に入る時は、自ら手まで引いて。

「薬などはお持ちですの、トリンさん？」

「常備薬をもつ飲んだとの事です」

自分を除けば三人の人間が居た。ウイネにキスク、それと御者。キスクは付き人といったところだろうか。当然のように自分を馬車に招き入れた二人に対し、御者はやや不信そうな目をこちらに向けていたが、何も言いはしなかった。

「多少なり揺れますけれど、大丈夫ですの？」

馬車の右側面に寄りかかった自分に、ウイネが尋ねた。勿体ないくらいの気遣いだった。無言のまま、首肯で返す。

それを許可の合図としたかのように、馬車がゆつくりと動き出した。歩くより多少速い程度。それほど速くはない。いかにも、優雅な乗り物といった感じだ。

「それと……失礼になるかも知れませんが、トリンさんのご自宅とというのは、どちらに？ 近くまで送るにしても、場所が分からなくては……」

こちらは、答えにくい質問だった。靴屋の角を曲がるようになったのは神子の試験が始まってからだから、記憶力の悪さもあって靴屋の名前はよく覚えていない。息苦しさもあり、説明するのは正直に言えば億劫だった。

「地図があります」

どう答えるべきか、それを考える間もなく、キスクが助け舟を出した。馬車に備え付けらしい荷物袋の中から、ストランドのほぼ全

域を含めた一メートル四方程度の地図が取り出された。

「トリン、家はどこにあるんだ？」

家の場所はそうかからずに分かった。だが、すぐには答えなかった。億劫だのとは別に、自分の家を簡単に他人に教えることに対しては、抵抗があった。

「ドームはここ、試験のあった場所はここです」

逡巡を、地図を読めていないと思ったのか、ウイネが地図を指差した。境界線が巨大な弧を描いている巨大な建造物がドームであることは疑いようもなかったし、自分の使っている通りの名くらいは分かっていた。

「そして、私の家は、ここに」

指が通りに沿って動き、ある一点を指した。動作に不自然さが無いのを見ても、嘘というわけではなさそうだ。他人、それも金持ちでもない人間に自分の住処を教えることに抵抗はないらしい。

つくづく、変な奴だ。ただのお人良しと言ってしまえばそれまでなのかも知れないが、どうもこちらのペースを狂わせる。

「ここ」

地図の一点を指差した。地図の端の方だった。

「あたしの家だ」

こうして見ると、あまり近くはない。この速さなら、ウイネの家から十分弱はかかるだろうか。

「方向は同じですけど……近くはありませんわね」

トリンの指した場所を注視し、ウイネは考えるように腕を組んだ。「サンド。先にトリンさんを家まで送って差し上げることは出来ませんの？」

それには、トリンが驚かされた。

「そんな事……」

「残念ながら」

トリンを遮って、サンドと呼ばれた御者が低い声を返した。

「時間通りに帰らないと、旦那様、奥様が心配なさいます」

さすがに、もともとそれは難しいと分かっていたのか、ウイネは再び黙った。

「では」

口を開いたのは、キスクだった。

「ウイネ様の屋敷に戻られた後に、私がトリンを送っていきましょう。喘息が治まるまで、少しの間家で休ませてやってもいいでしょう」

キスクは、先程からずっとだが、静かな微笑を浮かべている。いかにも、立派な使用人という感じだった。

「……キスクは、トリンさんと面識があるのですよね？」

「はい」

キスクの微笑を見つめ、ウイネは今度はトリンに尋ねた。

「トリンさんは、それで構いませんか？」

「……屋敷に、入れるのですか？」

トリンが答えるより前に、サンドがわずかな不満を含めて呟くように言った。

「ええ。構いませんでしょう？」

「……はい」

「トリンさんも、いいですか？」

トリンは首肯を返した。ここまでしてもらえとは思わなかったが、感謝は表情に出さない。相変わらず仏頂面で、トリンは馬車の端に寄りかかっていた。

そんな自分が嫌になる。

3 .

3 .

まもなく陽が落ちた。

ウイネの家、いや、屋敷は、ウイネが自分を拾った通りをまっすぐ行った先にあった。いつも馬車に追い抜かれることがなかったのは、ウイネの帰り道がもともと自分のとは違っているからなのだろう。今回たまたま封鎖で回り道をして、偶然ウイネの帰り道に入り込んだ。

思ったよりは大きくなかった。少なくとも、嫌味な感じの大きさではなかった。飾り気もそれほどではない。石造りの白い直方体を切り出して作ったような大人しい感じの二階建ての家で、恐らく敷地に含まれるのであろう周囲には、柵の代わりの高い植え込みの他、スギがこぎれいに植えられている。

入り口は通りに面してはおらず、馬車は屋敷を回りこむように小道に入った。裏庭にあたるのであろう、自分の住んでいる家くらいの広さはある空間に、陽がないせいで色の分らない花の植えられた花壇があり、馬小屋があった。

入り口に続く石造りの階段の目の前で馬車が止まり、最初にキスクが降りた。続いて、キスクが下から手を差し伸べ、それに支えられて、ありがとう、と言葉を添えてウイネが降りる。

喘息は多少は良くなっていた。少なくとも、傍から見て大丈夫そうに見せることが出来るくらいは。

「トリン」

降りようとする、キスクが手を差し出した。ウイネに対して差し出したのと同じように。

「……ん」

手を添えられ、降りた。ふらついたりすることはなかった。

「トリンさん、調子はどうですか？」

ウイネが微笑んで尋ねた。

「……大分よくなった」

「そうですね。それは良かったですわ。でも、折角ですから、少し休んでいって下さいね」

「あ、ああ」

「帰りはキスクに送らせてますわ」

ウイネが視線をキスクに向けると、キスクは、分かった、というように軽く首肯した。いかにも通じ合った感じだった。キスクは、自分はウイネの使用人だと言ったが、それ以上のことは言わなかった。どのくらいの間その立場にいるのかも、どのような仕事をしているのかも。

「トリン、歩けるか？」

その言葉は、昔も聞いた事のある言葉だった。身長差がなければ肩を貸したりも出来るだろうに、自分とキスクでは目線が肩の高さにしかならないくらいの身長差があり、肩を貸すにはいささか不自然すぎた。

だから、実際に歩けない時は、キスクにおぶってもらったこともあった。

「……いい、いいよ」

よく考えれば、歩けるか、の答えにはなっていなかったが、短く答えて、ウイネの後に早足で続いた。

連れて来られたのは屋敷の一角にある小さな部屋で、小さいと言っても、うちの台所——一番広い部屋くらいはあった。その部屋には大きな窓があつて、窓際に、陶器の器の中に植えられた植物が置いてあった。赤い、三人くらいが座れそうなソファが二つあつて、その間に木製のしゃれた形のテーブルがあつて、壁際に読む気も起きないような厚くて難しそうな本が整理されて入っている本棚があ

った。

それだけだった。自分から見ればこれだけの広さの部屋に、それだけのものしかなかった。

それでも、やはり嫌味という感じではない。要するに、いくら自分が『金持ちだからって……』とケチをつけようとしてもつけられないような、ちょうどいい場所だった。ようするに、センスがいのだろう。

そこに座っていてください、とだけ言い残し、ウイネもキスクもどこかに行ってしまった。部屋の中に一人だけ。どうすればいいのかわからなかった。まあ、休むために来たのだから、休んでいればいいのだろうが。

仕方なく本棚の本を取り出しては戻し、取り出しては戻し、と不毛に時間を潰していると、ようやくウイネが戻ってきた。

「あら、面白い本がありました？」

「……どれもこれも、難しすぎて分かんない。あたしみたいのが読む本じゃないよ」

あったのは、ストランドの歴史を記したらしいもの、地理的特徴をまとめたらしいもの、といかにも『知的な』人間が読みそうな小難しいものばかりだった。これに関してはケチがつけられた。

「そうですわよね」

一瞬、馬鹿にされたのかと思った。だが、違った。

「私も、とても読みません。こんな面白くない本を応接間に置くのはやめましょう、といつも訴えているのですけど、お母様、お父様が聞いてくれなくて」

「……あ、そうなんだ」

また、調子を崩された。面白くない、と少し思いつつ、ソファに戻る。

「紹介しますわ」

猫背でソファに座ったトリンの目の前で、ウイネが背後の、シンブルな模様の彫刻が施された木製の扉を示した。

「私の両親です」

何故こんなことになっているのだろう、と思った。

自分の座っていない方のソファにウイネが座り、その両脇にウイネの両親が座っている。若くはないが、人の良さそうな人達だ。母親の方が少し太っていて、父親の方は平均的な体格。二人とも金髪で、白い肌だった。

そして、自分の左手にキスクが座っている。

高そうなグラスに注がれた水が、自分のために用意されていた。喉を潤せということなのだろうが、こんな風に囲まれては飲むにもあまりに飲みづらい。

「トリンさん、というのだったかね」

父親の方が口を開いた。

「私はシーズ＝ミデム。ウイネの父親だ。よろしく。こっちは妻のスーラ」

愛想のいい微笑みを浮かべて、二人が頭を下げる。

「どうも。トリン＝ラザルです」

仏頂面のまま、名乗りだけを返す。それでも、愛想のいい笑みは消えない。

（……やたらと人がいいのは遺伝かね）

そんなことを思いながら、グラスに口をつける。かすかにレモンの香りがした。それに一瞬驚き、驚きを隠すために、さらにグラスを傾ける。

「トリンさんは、ウイネと同じ神子候補なのだそうだね」

傾けたグラスの向こうで、シーズが口を開いた。

「ウイネに聞けば、優秀な候補の一人なのだから。今日まで残っているそうじゃないか」

（……いや）

言葉を聞き流しながら、

（ウイネに比べると、なんか偉そうな物言いだな）

ウイネはそんなことを思った。少々金持ち臭いというか、何と
うか。

「お宅のウイネさんの方が優秀ですよ」

「いやいや、そんなことは」

トリンの感情のない言葉に、シーズは嬉しそうに笑った。

「そうそう」

母親の方——スーラだったか——が、代わって口を開いた。

「さつき、ドームの近くで予言があったそうね。大丈夫だった？」

「はい。通り道から二つずれた通りでしたから」

答えたのはキスク。

「乗合馬車の事故の予言だったそうです」

「そう」

安心したようにスーラが微笑む。

「何もなくて良かったわ——神子の試験の最中に予言に助けられる
なんて、面白いわね」

別に面白くはなかった。だが、神子と予言、その間に関係がある
ことは確かだ。むしろ、絶対の因果関係があると言うことも出来る。
ドームから与えられる、未来を予知する情報。それが予言。そし
て、本来ドームの中に住む『神族』でない身ながらドームに入るこ
とを許される、言わば予言の媒介人となるのが、神子の役割だ。

その制度が始まったのがいつなのかは伝えられていない。毎年こ
の時期になると、神子の試験なるものの開催がドームから告げられ、
ファーサル中から集まった神子の候補者たちが、ドームの与える試
験を受け、ふるいにかけれ、そして最終的に残った一人が神子に
選ばれる。神子はドームに迎えられ、そこで三年間予言をドーム外
の人々に与える仕事に従事した後、新たな神族としてドームで暮ら
す権利を得る——らしい。

神子の他にドームに入ることを許された人はおらず、また仕事を
終えた神子の中にもドームの外に出てきたものがないため、真実
なのかどうかは正直なところ疑わしい、と思う。ただ、この国のど

こでもそれは真実として受け入れられているし、否定する根拠もないが。

神子の試験を受ける資格があるのが、学校を出て四年以上を経過した——つまり、満十六歳以上の、かつ特定の仕事に従事していない——白いチョーカーの——女子。ついでに、清らかな魂の器を持つ、言い方を変えれば、男を知らない、という条件もある。

成人の儀——仕事を決め、チョーカーを染める、法の上では子供と大人の境目となる儀式——を受けるのが、一番遅くて満十七歳になる日だから、歳をごまかしたりしなければ事実上チャンスは一回だ。国中から集まる百、多いときには二百数十人の神子候補の中で頂点に立ち、一度きりのチャンスを掴んだ一人だけが、神族としてドームの中に迎え入れられる権利を得る。予言を与え、国を導くというある種の英雄として讃えられる。

要するに、神様の下さるありがたい未来予知が予言で、それを伝えるのが神子ということだ。

その神子の試験も、今年は明日が最後の試験だった。残っているのは五人。その中に、自分が居る。そしてウイネも。

「ところで、トリンさん」

一方的なおしゃべりがしばらく続き、そして話に移った。

「神子という職業に、特別な思い入れはおありになるのかな？」

それが本題だと分かった。シーズの雰囲気が変わったように思えた。

「お父様。トリンさんも、思い入れがあるからこそ、神子候補になっっているでしょう」

「ああ、そうだな」

ウイネが茶化すように言ったが、シーズは受け流すように答えた。
「そうでしょう、トリンさん？」

「……………」

ウイネはトリンに声を掛けたが、意図的に沈黙を返した。そうか、こんなことがあるのか――トリンはシーズを正面から見つめ返したまま、冷静に考えていた。シーズの意図が口ぶりから分かった。

となると、ウイネも、最初からそのつもりで自分を拾ったのだろうか。シーズの意図を理解していないような態度は、演技なのだろうか。

「思い入れがあれば、どうするつもりですか」

トリンはシーズを睨みつけた。

「買い取る、というんですか。神子の権利を」

残った五人の中の一人である、自分から。ウイネを神子にするために。あるいは確率を上げるために。

「……何の話ですか？」

ウイネは眉をひそめた。演技というよりも、ただ性格が天然なだけであるように思えた。実際のところがどうかは知らないが。

「……そういう風に言われると、聞こえが良くないが」

「聞こえが、ね」

トリンは誰にも聞こえない声で呟いた。そして、小さく鼻で笑った。

「ウイネは、人一倍神子になりたがっている。昔からずっと、神子になりたいと言っていたんだ。だが、どんなに強く願っても、チャンスは一度しかない」

トリンは沈黙したまま、続きを促した。静かな怒りを押し殺しながら。金持ちが皆、こういうことを考えて生きているのは知っていた。ウイネがどうやら加担していたらしいというのは、少し意外だった。

「だとしたら、少しでもそのチャンスを広げてやりたいと思うのが、親の正直な心だ」

「お父様！」

ウイネがそう叫んだのは、正にトリンが、お断りだ、というような意味のことを言おうとした瞬間だった。

「……………」

軽蔑の文句を言いざま立ち上がりとうしていたトリンは、それをウイネに遮られた形になった。本人は、そんな意図などなかっただろうが。

「トリンさんに対して失礼です！」

「……ウイネ？」

驚いたような声を返したのは、自分ではなくシーズの方だった。困ったような表情。ウイネは、シーズが話を持ちかけることを知らなかったのだろうか。

「神子になることを強く願っているのは、トリンさんも変わりありません！ だからこそ、今日の日まで試験を通過してきているのです！ それを金銭で買収するなど、卑怯者のやることではありませんか！」

ウイネは純粹に怒っていた。口調の強さからそれが分かった。

「だがウイネ、私はお前が、自分で選んだ神子という道へ進むことを何よりも望んで……」

「それはトリンさんの両親とて同じはずです。いくらお父様でも、トリンさんを不平等な立場に追いやるようなことはして欲しくはありません」

言葉に、キスクが僅かに反応したのが分かった。キスクは、『トリンさんの両親』がこの世に生きてはいないことを知っている。

「悪いけど」

シーズはウイネに睨まれ、明らかに困惑していた。話を打ち切るには、今が好機だろう。

「金をちらつかされても、試験を下りる気はないね。話が済んだなら、そろそろ帰らせてもらう」

返事を待つようなことはせず、トリンは席を立った。

「トリンさん！」

ウイネが呼び止めた、が、振り返らなかった。シーズは何も言うてこない。

「邪魔した」

振り返らずにそう残し、部屋を出た。入り口までの道は常に覚えておくようにしている。他人の手を借りなくても帰れるように。

廊下を抜けて広い玄関に出る。屋敷の門をくぐって——気付いたのは、その時だった。

(……………)

用意周到にしようと思ってはいるのに、こういうドジをする時がたまにある。自分の間抜けさに腹が立った。腹が立ったよりも呆れたというほうが適当だろうか。

(あの部屋に、戻るのか……………?)

ため息をつき、振り返る——と、

そこに、キスクが立っていた。

「忘れもんだぜ」

トリンが部屋に忘れてきた、ランプを持って。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1718c/>

リミテッド

2010年10月12日02時43分発行